



トクヴィル問題 : アメリカ民主主義における市民参加 (海外の社会学)

スコッチポル, シーダ
福岡, 千珠(訳)

(Citation)

社会学雑誌, 15:75-87

(Issue Date)

1998-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010919>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010919>



トクヴィル問題

——アメリカ民主主義における市民参加——

シーダ・スコッチポル

福岡 千珠訳

以下に抄訳するのは、シーダ・スコッチポル (Theda Skocpol, 1947-) ハーヴァード大学教授の "The Tocqueville Problem: Civic Engagement in American Democracy." (1996) である。教授は、九六年度のアメリカ社会学歴史学会年次大会 (於ニューヨーク) において会長演説を行なったが、これはそのタイプ原稿を訳したものである。監訳者は、ハーヴァードで何度か教授とお会いする機会を得、その際に翻訳の許可をいただいた。教授は、一九七五年に同大学より社会学で博士号を取得した後、五年間シカゴ大学で教え、八

六年よりハーヴァードに戻り、現在は行政学部および社会学部の教授である。教授は、しばしば国家社会学リバイバルの指導的人物であると見なされているが、「最近では特に北米およびヨーロッパにおける現代福祉国家の研究に関心を向けている」(ハーヴァード大学社会学部発行の学部案内冊子・教員紹介欄より)。

訳文は福岡が作成し、油井が監修した。訳文の不備は監訳者である油井の責任に帰する。なお、これは抄訳であり、紙幅の都合上原文を大幅に割愛した箇所がある(油井清光)。

「歴史、民主主義、そして公共政策」、今年の社会学歴史学会の集まりの会長演説として私はこのテーマがふさわしいのではないかと考えました。過去一五年間にわたって、私はアメリカ合衆国の政治及び社会学政策の様式、その可能性と不可能性について理解すべく研究してきました。

その成果として、現在一般にまた学者によって行なわれている、アメリカ民主主義における市民参加についての議論を再考するため、私は、歴史的証拠を検討することにしました。我々、社会学歴史学者は、現代社会の関心事について語る資格をはっきり有しています。我々は、現在進行中の

議論に、非常に有効な証拠や、洗練された説明を持ち出すことすらできるのです。

今日の著名な評論家・解説者たちの間には、「郷愁」がひろがっていて、市民たちが健全な市民として参加していた時点、そしてアメリカの民主主義が今よりも栄えていた重要な時点を、アメリカの過去に求めているように見受けられます。専門家たちは、現在の、一見して病的状態に見える民主主義と市民生活を蘇らせるために、今日何をなし得るか、そのインスピレーションと教訓を、そこから引き出したいと思っていますわけです。

黄金時代はいったんのか

もちろん、様々な黄金時代が引き合いに出され、検討されました。しかしそれはしばしば後向きの、党派的な感情に依存していましたが。

社会的に著名なアメリカ人たちのほとんどが、もはやリベラルである事を自認しようとしないうちに、今なお自らそう自認するような人達は、アメリカ民主主義の黄金時代をいつも一九三〇年代から四〇年代に設定します。おそらくこれはF・D・ルーズベルト大統領が、大胆かつ進歩的なリーダーシップを発揮した時代——そしてまたS・フレイザーが最近『ニューヨーク・タイムズ』紙上において述

べたように、労働組合が「利益共同体を意味しただけでなく、その直接のメンバーをこえて社会全体に対しても多くを約束するような活動をする社会運動を意味するような時代であった」のです。

しかし、非リベラルたちは、アメリカの市民参加が、組織された労働以上のものを形成し、歴史的には、ニューディール期よりもはるか以前にさかのぼると主張しています。そしてこのことはまったく正しいのです。労働組合は、単に、多くのアメリカ人が市民社会において組織づくりをしてきたいくつもの方法のうちの一つでしかなく、しかも主な方法でさえありませんでした。多くの左派の人達が、組織された労働者階級や、その不在の問題にしか目を向けないことは、現在の市民参加に関する議論が保守や中道——右翼の政治的傾向をもつ人々に支配されている原因となっています。しかし、私たちがすぐあとに見るように、これらの人々は各々盲点をもっている可能性があります。

これは一つの典型ですが、非リベラル派は、アメリカの過去をマルクス主義者によって色付けられたメガネを通して見ているのではなく、アレクシス・ド・トクヴィルの目を通して見ております。トクヴィルは、フランス人貴族であり、生まれたての一八三〇年代のアメリカを旅し、観察し考え、それをやがて『アメリカの民主政治』として出版しました。

トクヴィルの著作は、現代の世界に最も大きな影響を与えた政治的民族誌の一つでした。政治的民族誌とは、自国の政治論争に影響を与えるべく書かれた、他国に関する一連の綿密な記述による観察を意味します。彼は、初期の共和国アメリカへの自らの踏査を、彼の同国人であるフランス人に以下のような主張をするために利用しました。フランス人は、市民社会において自発的結社を奨励し、それを、中央集権化をはばむ新しい緩衝剤として、すなわち旧体制制下では社会保護的役割を果たしていたとされる貴族達の代わりになる民主主義的緩衝剤とすべきである、と。「アメリカ人は、何歳であろうと、どんな地位の者であろうと、またどんな気質であろうと絶えず団体を形成している」、トクヴィルは有名な何度も引用された一説でこう述べています。彼はまた、この幸福な状態は、地方を越えた政府がほとんど存在しない故に可能となっている、とも言っています。何千もの地方政府のレベルを越えて、初期のアメリカ合衆国をまとめ上げていたのは、「合衆国」の名に値するような状態によってではなく、宗教上の志向や、商業、人類平等主義の慣習、自由に結合した市民たち、そして法律家や裁判所によって実施された一般的な法律などである、とトクヴィルの目には映ったのです。

『アメリカの民主政治』を書くにあたって、トクヴィルが反一国家統制主義者としての目的をもっていったことを考

えると、一世紀半の後、現在アメリカの連邦政府を批判する人たちが、この偉大なフランス人が自発的結社を官僚主義的国家権力と対峙させ、強調したことを、称賛しているのは分からねえことではありません。

レーガン後の共和党内部もしくはその周辺の、市民社会志向の保守主義者たちは、一九世紀初頭の再現を夢見ています。彼らは、M・バロンの印象的な批評のタイトルを用いて言えば、アメリカ人は文字どおり「トクヴィルに戻りつつある」と信じています。バロンが説くように、「今日の脱工業化時代のアメリカは、重要な点において、我々のほとんどが生まれ育った工業化時代のアメリカというよりはむしろ、トクヴィルが『アメリカの民主政治』において述べたような工業化以前のアメリカによく似ている」。バロンや、一九九〇年代の他の保守主義者たちは、トクヴィルのアメリカの再現は、他国や別の時代においてなら、国家によってなされていた社会の機能を、多くの種類の自発的結社に任せることによって、軽い政府によってなされねばならないという結論に達したのです。

一方、現代の（多くの民主党員を含んだ）政治的中道主義者たちは、アメリカの黄金時代を、はるか工業化時代以前に設定することに疑問をもっています。中道主義者たちは、黄金時代を一九〇〇年代初頭の進歩時代におき直す傾向があるのです。この時代は、その間に地方の自発的結社

の増加があったと思われることや、また地方政府（最高で州政府）のレベルにおいて、産業主義に対する立法上の対応が革新的な「実験」として試みられたことなどによって、称賛されています。中道主義者は、アメリカが新しい進歩時代をもつことを望んでいるのです。ウッドロー・ウィルソン流の「新しい自由」を標榜して、民主主義指導者会議（DIO）は、一九九〇年代の民主党が「課税して施策する」、すなわちニューディール流の福祉国家による父親的干渉主義を避け、その代わりに困難な社会問題（全く政府の官僚政治によつては解決され得ないような）に取り組みにあたって、より大きな役割を、自発的結社や地方集団が果たすよう奨励すべきであると主張したのです。

それゆえ、産業主義や、市場の影響力に対する規制の必要性に関して意見の食い違いを見せているにもかかわらず、今日の共和党と民主党の保守主義者たちは、最小限度の国家統治と活気に満ちた地域の自発的結社という見解においては、意見が一致しています。共和党と保守的な民主党員は、もし我々アメリカ人が市民の黄金時代を再現しようとするならば、連邦政府の国内事業は、完全にまたは部分的に解体されるべきであるという意見で一致しているのです。多くのマスコミに登場する知識人たちは、この右から中道にまで広がりつつある合意に近いものが、この議論に決着をつけるのに十分であるとしています。しかし、アメリカ

国民が愚かな道へと突き進む前に、我々としては、最も優れた歴史社会科学ならば、民主主義の市民参加が、いつ、どのように、そしてなぜアメリカにおいて栄えたのかという問題についての保守主義者と中道派双方の主張に対して疑問を呈し得るものであるということを知ってもらいたいと思います。私は、ここで国家を社会に対峙させるような（もしくは国民国家を地域の自主主義に対峙させるような）ゼロサム的な考え方で、全くアメリカの市民参加について理解することはできないということをお納得していただけるように話したいと思います。国家対社会的な考え方は、現在のこの国の市民に関する困難な諸問題や、将来それに何ができるかといったことについて、賢明な論証をするための基礎を築くことはできないのです。

トクヴィル時代のアメリカにおける市民参加

二〇年以上も前、社会歴史家R・ブラウンは、植民地時代後期から初期の国家の時代にかけてのマサチューセッツ州における社会の発展を研究し、一連の非常にはつきりした、地域的、局地的、州レベル、そして全国的な、自発的結社が、一八二〇年代までに現れていたことを立証しました。

自発的結社の成長は、単に商業化と都市化にともなう副

産物ではありません。米国独立戦争以前に既に、必要な大きさを備えた多くの都市は現れていましたが、そこには活気に満ちた一組の自発的結社も現れてはいなかったのです。しかるに一八〇〇年代初期までには、自発的結社は、大小の地域共同体において発生しており、それは商業的变化や人口統計上の変化よりも先だっていました。自己啓発に関する宗教的、文化的理念や、新聞が広く読まれるようになったために、地域の外の商業上の事柄や、また公的な事柄について人々が意識するようになったことが、そこに重要な役割を果たしました。

トクヴィル自身は、ブラウンの研究が強調した、多くの地域外の影響について十分承知していました。トクヴィルは、アメリカが政治団体の無制限の自由を、日常的に活用しているただ一つの国であることに驚嘆しました。明白に政治的な団体よりも、純粹に社会的な団体の方がより普及しているのは事実だが、しかしアメリカにおける政治的結社の自由と機会は、より一般的な「結社への嗜好」を生じさせているようである、と彼は考えました。さらには、自由かつ積極的参加を促すことを標榜した政治が、人々が地域を越えて結びつくことを奨励しました。「政治はたくさんの団体を生ぜしめただけでなく、包括的な団体を作り出した」と、トクヴィルは書いています。

『アメリカの民主政治』は、初期のアメリカの新聞につ

いても注目しています。「新聞は団体を作り、団体は新聞を作る」と、トクヴィルは書いています。「このように、アメリカでは世界中で最も多くの団体と新聞を見つげられる」。J・クレバリーが彼のすばらしい新著『広がりゆくニューズ・フランクリンからモースにかけてのアメリカの郵便システム』において指摘しているように、「トクヴィルは、ケンタッキーとテネシーの奥地を駅馬車で旅し、その荒涼とした森において手紙と新聞が驚くほど流通していることについて特筆しました」。しかし、このフランス人の旅行も、多くのアメリカの駅馬車会社が議会を通して助成金を受け取っており、その結果、郵便が小さな地域社会にも届けられ、代議士が遠い地域から帰省することが出来なければ、ありえなかったでしょう。トクヴィルはまた、一八三一年の時点では田舎であったミシガン州の住人が、北フランス省におけるフランスの商業的要所の平均的住人よりも、多くの地域外の情報に接していると、判断しています。この状況がアメリカの郵便網によってもたらされたということを知っていたにもかかわらず、この偉大なる政治民族誌学者は、彼の観察が、初期のアメリカの状態に関してどういった意味をもっているかを理解するまでにはいたりませんでした。トクヴィルは、フランスの国家権力を経験し、それを否定せんとする熱意にあふれていたために、それが見えなくなっていたのです。

近代初期のロシアが、軍隊をもった国家というよりも、国家をもった軍隊であった、という皮肉はよく知られています。同様に、初期のアメリカは、郵便局をもった国家というよりは、国民に対し、かけだしの国家の現実感を与えていた郵便局であったと言えるかもしれません。驚くほどの大きさと広がりをもったアメリカの郵便局を見ると、初期のアメリカにおいて「政府」や「行政」が「不在」であったという見解が正しくないことが分かります。

植民地時代のアメリカでは、多くのヨーロッパの国々のものと比肩し得る初期段階の郵便組織が既にあり、そこでは大きな都市や町が、とりわけ大西洋岸に沿った地域で、ゆるく結びついていました。リチャード・ジョンが指摘したように、「一八二〇年までに、アメリカの郵便組織はイギリスの二倍、そしてフランスの五倍以上の数の郵便局を持つようになつた。これは言い換えると、一〇万人の住民に対してイギリスが一七、フランスが四つの郵便局を持っていたのに対して、アメリカは七四の郵便局を有していた」ということです。

彼が述べたように、郵便組織は、産業主義以前のアメリカにおいて、あらゆる種類の企業のうちで最も大きなものでした。そして、「大多数である市民」にとつて、それは「中央政府」でした。一八三〇年代から四〇年代にかけて、その組織は、連邦の職員の四分の三を擁していました。そ

して一八三一年の郵便職員八、七六四人と、四一年の一四、二九〇人のうちのほとんどが、「地方の至るところに広がった村や町の、非常勤の郵便局長であった」のです。連邦軍は、それより少ない人員しか雇っておらず、そして彼らは専ら「アパラチア山脈を越えた西部の人里離れた駐屯地に身を置いて」いました。

アメリカ政府の制度的構造は、あらゆる点で郵便網の広がり深く関係していたことは明らかです。

比較的安全迅速で、広範囲である連邦郵便制度は、初期のアメリカの商業を飛躍的に発展させました。一方で郵便制度は、アメリカの市民社会及び民主政策にとつて、いっそう重要になっていました。議会は、市民と自由に対話するために、無料配達郵便物や郵便組織を利用することが出来ました。他方、市民の方でも、たとえ遠く離れた僻地の村に住んでいても、簡単にお互いに意志の疎通を図ることができ、地方政府のみならず議会や州議会の行動を監視することができました。自発的結社は、この郵便を活用するために、すぐに彼らのメッセージを「新聞」の形態で発行することを学びました。

つまり、トクヴィルが魅了された初期のアメリカの市民運動の活気は、「(実は) 独特の国民国家の代議制の機関や中央集権的な活動と結びついていました。アメリカという国民国家は、君主制の革命前のフランスのように、強固で、

多目的行政の官僚政治ではありませんでした。しかし、いくつかの点で、初期の連邦政府は、フランス国家よりもはるかに行政において有効に機能していました。米国議会の代議制によって作り出され、またその制度を促進した初期のアメリカ郵便制度は、実質上すべての白人男性を含んでいました。それは市民間で増大していた通信をいっそうさかんにし、そしてますます多くのアメリカ人を地域的な、また全国的な道徳改革運動や、選挙運動に熱心に参加させる結果をもたらしました。

アメリカの民主主義においては、こういうことが長期間つづいたのです。議会の代表や政党の指導者と同様に、他の無数のアメリカの団体は、二〇世紀に入ってなお市民に關係のある情報を流布させる方法として郵便を利用したのです。

産業期のアメリカにおける市民参加

一九九〇年代の保守主義者たちがトクヴィルに追隨して、初期のアメリカ連邦政府が市民参加に与えた影響を見過ごしたのと同様に、民主主義者指導者会議のメンバーなどの九〇年代の中道派たちは、産業期のアメリカ政府が用意した、民衆に根差した団体のための非常に好条件の機会構造のことを誤解してしまつたのです。

我々は去年の春、アメリカの全歴史にわたって、いかなる時点であれ成人人口の１％以上を会員とすることができた、すべての自発的結社を確認し、調査しようと試みました。我々の研究の目的は、変わりつつあるアメリカの大規模な自発的結社という分野の地図を、歴史をとおして描いてみることに、またそれらの組織構造や会員や活動を、時代を越えて比較すること、そしてどのようにそれらが宗教的また市場の制度と、政党や選挙と、そして地方、州、全国レベルの政府と関連してきたのかを知ることにあつたのです。我々のリストには、エリートだけではなく、幅広い会員をもっている団体でなければ載せませんでした。それゆえ我々は、アメリカの社会と政治における、組織された人参加の変わりつつある基盤を展望する窓を作りつつあるといえるでしょう。

しかし我々のデータ収集は、まだ完全ではなく、いまだ「仮説を試す」段階にはなつていません。現時点では、我々は、包括的な自発的結社についての予備的なマスター・リストが示すパターンを指摘することしか出来ません。この準備段階のリストから、いくつかのことが明らかにあります。自発的結社をもつばら年代順に表に並べることによつて、初期のアメリカ合衆国が、ほとんど内向きの地域共同体の集まりであつたといふこれまで当然視されてきたイメージは、まちがっていることが分かります。おそら

く、「近代の」中央集権的、官僚主義的な組織より以前の状態は、そうだったといえるのかも知れません。しかし、これらのデータが示すように、アメリカ史上の三分の二以上の包括的な「地域をこえた」自発的結社が、一九〇〇年以降に設立されています。さらに、我々が今までに確認したうちの五分の一以上が（五三のうちの二二が）南北戦争——それはアメリカにおける「前近代」と「産業化時代」を分かち時点として、しばしば引き合いに出されますが——以前に設立されています。もし我々が政党と教会を考慮に入れないとしても、非常に多数のアメリカ人が、非常に早い時期から地域をこえた団体を通じて、ともに運動していたということになります。

二つ目のパターンが、年代順に配置されたデータから浮かび上がってきます。大規模な団体の創立が、驚くほどアメリカの歴史全体にわたって広がっています。それでも、一八二〇年代と三〇年代、また一八五〇年代から九〇年代まで、一九一〇年代後半、そして一九三〇年代と四〇年代に、ある程度まとまった団体創立がみられます。とりわけ選挙における熱心な参加と競争の時期が転機でした——それは、とりわけ一九世紀、アメリカの政党組織が最も競争的な様相を呈していた期間の、第二期（1828〜56）と第三期（1876〜96）の間で、それは選挙権のある（白人男性の）投票者がかつてないほど動員された時でし

た。このデータからも、アメリカ最大の戦争、南北戦争を取り巻く熱気が全国的影響をあたえ始めているのが明らかです。

二〇世紀については、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして世界大恐慌をめぐって国民が一致団結した時期には、団体の設立のより小さい山が生じているように思われます。これらの時期は、連邦政府の活動や影響が比較的大きな時期です。それでも、保守主義者たちがしばしば語る話とは逆に、包括的な自発的結社の設立は、これらの時期においては、押さえられていたというよりは、奨励されていたようです。

アメリカ政府と団体の拡張とのゼロサムでない関係は、われわれが一八九〇年代（とりわけその後半）に設立されたほとんどの自発的結社が二〇世紀においても生き残り、隆盛をみせ、しばしば一九六〇年代と七〇年代において会員数のピークに達したことを見ると、非常に明らかです。州や国家の政府が、その機能や意志決定を増大させたときに相前後して、多くの一九世紀に始まった団体は、個人会員数という点で「むしろ」非常に大きくなっています。同時に——そしてこの点が非常に重要なことなのですが——それらは、拡大していった四八から五〇のすべての州の、またなんらかの重要性を持つほとんどの地域共同体において、新しい団体を生じさせるか、傘下に収めていく

かしていきました。二〇世紀のほとんど初めから終わりまで、アメリカ国家の創成期に主流であったのと同じ現象を見る事ができるのです。すなわち、その現象とは、多かれ少なかれ都市部を同一のネットワークに取り込む、地理的な拡大、競争、統合へと向かう力の事です。二〇世紀全体にわたり様々な出来事がアメリカの統治形態をめぐって起きましたが、この種の組織化された市民社会の拡大が排除されることはありませんでした。反対に、私はそれが、市民社会の拡大を刺激し、促進し、助長したきたのだという事を主張したいと思います。かなり多くの、地域を越えた団体は、最後には地域の外の政府と直接にかかわることによって隆盛しました。アメリカの一九世紀民主主義の

猟官的かつ、非常に野心的、大衆動員型の政党が一八九〇年以降は衰退するにつれて、地域に根差し、それでいて地域を越えて組織された団体が、立法機関との、また新しい行政政府との、新しい直接的な関係を切り開こうとしました。一方で多くの自発的結社もまた、全国的な組織を作り上げました。

これらの自発的結社は、地域においては民衆の意見に影響を与え、それを反映し、そして同時に地域、州、そして国家レベルにおいては、立法者や政府行政官に働きかけることに非常に長けてきました。彼らの「他と比較した場合の有利な点」は、多くの地域共同体や州にわたって、世論

に影響を与え、それを反映していることにありました。新聞や雑誌、直接の対話がまだ非常に重要であった時代にあつて、広く拡大した、地域に根差した団体は、立法者と行政官に影響を与えることが出来ました。なぜならそれらは、非常に多くの選挙区住民と直ちに連絡を取る（もしくはその代弁をする）ことができる主張しえたからです。

地域を越えた自発的結社は、現代アメリカの最も気前のいい社会政策の立法化と拡大に密接に関連していました。今日の保守主義者たちが非常に声高に主張しているように、公的な社会的支援とボランティア主義とは互いに対立しているどころか、それらは事実上全く共生して、繁栄しました。その例は、いくらでも挙げられます。

アメリカの自発的結社は、利用できるものはすべて利用するとの見地から、しばしば連邦政府の政策と財源を、——発足のためであれ、拡大のためであれ、はたまた再生のためであれ——利用していた、と仮定することができます。例えば、アメリカ農業連合会は、農業局拡張計画とニュー・デイル農場助成金の運営の機会を利用して、それらを自らの新しい地域への拡張促進に用いました。

我々の研究グループは、一体いくつの包括的な自発的結社が、アメリカの連邦制度の三層構造に相当する組織構造をもっているか検討しました。三層構造とは、つまり、地域集団、州の支部、国家（全国）センターを中心とした構

造のことです。連邦問題に対する暫定的解答として、ほんのいくつかの例外を除いて、地域を越えたほとんどのアメリカの団体は（最も最近に創立されたものについてまでは）連邦構造を持っていたことが明らかにになりました。

（例外は通常、労働組合のような、経済機能によって集められた人々、もしくはは主要都市に根拠を置く団体です）。

ほとんどの大規模な自発的結社が連邦構造を採用した理由の一つは、そのことが地域共同体および、州や国家の政府の双方と同時的に相互交渉することを可能にしたからです。この構造は、彼らが地域の人々と、政党や立法者の間を橋渡しし、そしてまた、関係のある立法行為を監視するか、それに働きかける機会を最大にしました。

しかし、同時に、この連邦構造は、アメリカの歴史のほぼ全般にわたって、より好ましいモデルとしてだけ役に立ったのだともいえます。社会学における制度論者たちがどのような仮説を立てようと、連邦主義は、いかなる大きな団体にとっても正統的かつ効果的な組織形態の一種の鑄型として役立つたのです。

アメリカの歴史には、私の研究グループのリストに入れるには小さすぎるような小さい集団をも含めて、三層を持つとうとする欲求が滑稽なくらい極端に走った多くの例があります。アメリカの自発的結社の長期にわたる発展を調査してみればわかることですが、実際、州および国家という

二つの地域外「レベル」は、しばしば地域的集団よりも先に設立されています。そうすることで、組織創立のための努力が水平的、垂直的に拡大し、やがて完全な合衆国の自発的結社の「正常な」鑄型が作り出されると考えられたからです。

今日への教訓

さて、魅力的ではありませんが、過去の話をここでいったん打ち切りにします。上述のすべてのことは、一九九〇年代のアメリカ民主主義における市民参加に関する論争に関して、何を語っているのでしょうか。

市民的ボランティアズムへ帰れという今日の呼びかけの多くは、巨大化し専横化したと言われる連邦政府を解体しようとする保守的な運動を背景にしています。このような議論をする人々は、ほとんどいつも、アメリカの過去には、地域的な市民ボランティアズムが、超地域的政府や政治から独立して——いや実際、それらに背いて——この国の問題を解決していた黄金時代があったと思ひこんでいます。

彼らはまた、二〇世紀の初期から中期にかけての連邦政府の活動の拡張が、アメリカにおける草の根の政治参加と市民的ボランティアズムを閉め出したとも信じています。しかし、私が述べてきたように、これらは初步的な経験的調査

にも耐えない、過去に関する神話です。

アメリカ国家史の初めからずっと、連邦政府の構造と活動は、地域を越えた、競争的形態の民衆の政治動員とともに、自発的結社を養い、奨励し、助成する「機会構造」を作り出しました。ほとんどの自発的結社は、常に地域において組織された（もしくは、とにかく地域や州の範囲内にあった）と言えるかも知れません。それは間違つてはいません。しかし、かなりの割合の自発的な努力が——そしておそらく非常に大きな割合の最も粘り強い努力が——その規模において州をまたがり、全米にわたつていたのです。そして地域的な努力は、単に上に向かつて沸き立つただけではありませんでした。地域を越えた組織はいつも、多くの地域活動を促進する役割をも果たしたのです。それらは組織者を派遣し、または人々が参考にできるモデルを提供しました。アメリカ人の地域集団は、単に内向きに自分たちの利害だけを見ていたわけではありませんでした。彼らは繰り返し——全国的なレベルにおいてさえも——事態の改善に役立ちそうな運動や、団体や、政党内の意見を同じくする人々と、手をつなぐ機会から力を得ていたのです。

多分今日の問題は、多くのアメリカ人が、極めて当然のことながら、政府を通して、また政府と関わりあいながら何かをなすために、有効に団結できるとはもはや思わなく

なつていくということなのです。しかしこれは多分、巨大な官僚制の連邦政府に問題があるということではないと思います。結局のところ、アメリカの国家政府はいまだに、他のほぼすべての先進国の国家よりも、歳入徴収能力や行政規模において相対的に小さいのです。問題はむしろ、アメリカ人から市民生活に有効に参加することの魅力を奪い、彼らが幅広い協力関係を結ぶことを、確実に困難にしている最近の社会や政治様式であるのかもしれない。

「我々のグループの研究は」最近の数十年間において、地域を越えたアメリカの自発的結社主義のパターンに大きな断絶があることを示しています。二〇世紀半ばのアメリカで隆盛をほこつていた、三〇から四〇の包括的な自発的連盟のうちの多くが、一九六〇、七〇年代から、絶対的にも相対的にも会員数の減少を見ました。そして設立されたいくつもの新しい大きな自発的結社のほとんどは、構造的に、何千もの小さな団体とは違ったものでした。すなわちそれらは、専従職員によって運営された、郵送者名簿（メンバーリング・リスト）団体だったので——それらは地域や州に団体の支部を持たず、三層の連邦構造も持つてはおりません。

おもしろいことに、今述べたことの例外があるとすれば、党派的な色分けの中の右派についてなのです。すなわち、妊娠中絶反対全米委員会とキリスト教信者連合は、現在の

コンピューターで自動的に作成されるダイレクト・メール・リストのこの時代においてさえも、新しい方法で古い連邦のパターンを復元しました。これらの団体は国家の行政府だけでなく地域や州の政府との関係にも積極的です。他にも、プロミス・キーパーズのような他の団体も、もうすぐ我々のリストに載るようになるでしょう。

しかし、アメリカの諸団体のうちの中道と「左」(のよ
うなもの)においては、実質上大きな全国的組織は現れて
いませんし、明確に延命を果たしたと言えるものもありま
せん。その代わりに、専従職員に率いられ、目的を限定し
た支持団体が、比較的特定の社会文化的なアイデンティテ
ィを代表するか、あるいは、限られた「社会的争点」であ
る政策問題を支持するという傾向が目立つようになってき
ていきます。それらが純粹に地域的なものでない限り、この
ような団体はいつもニューヨークかワシントンD.C.に本部
を置きます。そしてそれらの専門職員は、立法行為や訴訟
の詳細に専ら目を向けています。彼らはメールを通しての
み、多数のアメリカ人と接触しているのです(これに對す
る例外は、全米教育協会や全国教育者連盟、そしておそら
く全体としての環境保護運動でしょう。この運動は、専従
職員主導、ロビー活動型組織と、シエラ・クラブのような
地方クラブとの連合組織の双方を含んでいます)。

一九六〇年代からのアメリカの政治は、支持者動員型が

崩れ、ますますお金につき動かされるようになっていった
ということが分かります。J・オールドリッチが、彼の優れた
合理的選択・制度論的な著作、『なぜ政党か?』の中で
最近述べているように、アメリカの政党は現在、一八三〇
年代から一九五〇年代までずっと行ってきたように、政治
家と市民を仲介するよりはむしろ、候補者たちに、経済援
助やコンサルタント・サービスを提供しています。共和党
の右派を除いては、政党運動家もしくは団体運動家が、有
権者と直接コンタクトを取ることはほとんどありません。
アメリカ人が求められるのはほとんど献金なのです。

全般的に見て、アメリカ政治と市民生活において有効な
組織と見なされるもののモデルが、一九六〇年代から非常
に急激に変化したと言えましょう。おそらく右派を除いて
は、指導者も市民も、お互いが顔を見知っているような集
団を、州や全国の組織につながる全国的な連盟を建設したり、
運営したりしようとは思わなくなりました。もし新しい運
動を起こそうとするなら、人々は、全国的規模の事務所を
開き、ダイレクト・メールを用いて資金集めをし、メデイ
ア・コンサルタントを雇おうと考えます。一方、一般市民
は、自分たちは単にこのような努力の操作対象でしかない
と考えがちです。彼らは、自分たちのことを幅広い活動に
精力的である市民とか、草の根運動の指導者だとは感じな
いのです。そしてそれはその通りなのです!

さて、出発点にもどって、トクヴィルのことで締めくく
りたいと思います。もしトクヴィルが生き返って、二〇世
紀の終わりのアメリカをもう一度旅したならば、彼は、純
粋に地域的な、もしくは小さな集団の結社主義が失われて
行くであろう事と同じくらい、私が今述べたような全米的
傾向について、心配したでしょう。結局、『アメリカの民
主政治』における洞察の一つは、活発な民主的参加が、ア
メリカ人があらゆる種類の社会的かつ市民的団体を設立す
る方法を学ぶ一種の学校として役立つということです。彼
は、活発な民衆の政治参加が、彼らの社会的関わりを促進
する効果についてはよく認識していました。

トクヴィルであれば必ずや、今日私があなたがたと共に
見た予備的データを真剣に受け止めるでしょう。つまり、
包括的な自発的結社主義の規模と本質における最近の分水
嶺的变化を示すこれらのデータを。彼は、選挙への参加が
減ったこと、政党は現実の市民とコンタクトを取らなくな
っていること、そして選挙が、ますます高給取りで、時に
ディック・モリスにも似た世論調査員やコンサルタントや
テレビの映像を操作するメディア人らによって操作されて
いることを憂慮することでしょう。

トクヴィルは、これらの変化を大変重要だと考えたのでし
ょうが、それだけではなく、彼は今日の保守主義者たちが
彼の『アメリカの民主政治』を利用して、政治色のない口

マンチックな地方偏重主義こそ、国家政治のより大きな病
根に対する解決策という、不可能な主張を正当化しようとし
ているのを知ったら、きつと驚くでしょう。

ああ、奇跡でもなければ、アレクシス・ド・トクヴィル
が再び現れて、これらのメッセージを届けてくれることは
ないでしょう。だからこそ、我々、社会歴史学者が彼の代
わりにそうしなければならないのです！

(ふくおか ちず・神戸大学文学部三回生)